



物語文③「場面の読み取り」

森絵都『無限大ガール』より

大隅先生の国語講座/第3回

今回のねらい

大隅講座第3回では、物語文理解の鍵となる「場面の読み取り」の力を養います。第一回、第二回で養った「心情の読み取り」の力を生かしながら、より客観的に場面を性格に読み取る力を養いましょう。

【相川早奈（さな）は高校3年生で部活に所属していない。しかし、早奈はある程度なんでもできるために、人手不足のさまさまな部活から練習に呼ばれていた。演劇部には、早奈が付き合っていた先輩がいる。彼に「早奈には自分がない。」と言われたことが早奈に大きなショックを与えていた。以下は、演劇部から代役を頼まれ、演劇部の稽古に参加しているところから始まる。】

「相川さん、すごい！」

気がつくともホン読みが終わり、あたしは皆の拍手を浴びていた。

「しつかり入りこんでたよ。相川さん、お芝居の経験があるの？」

部長に言われ、あたしはきよとんと首を揺すった。

「いいえ、初めてですけど」

「本当に？ 初心者なんてうそみたい。相川さんが本物のネズ美に見えたよ。演劇の経験もないのに、なんで最初からあそこまで役になりきれなの？」

なんで？ 興奮気味の部長の前に、もしかして、とあたしは心のなかで思う。

あたしのなかでネズ美がどんどんふくれあがっていくあの感覚。もしかしたら、それって、あたしのなかにネズ美を受けいれる隙間がいつぱいあるってことなのかもしれない。 そうだ。あたしにはあたしがない。

だから、ネズ美になりきれる。

思いがけず演劇にむいている自分を発見したものの、ネズ美の皮を脱いで相川早奈へもどれば、やっぱり目に映るのはセンパイだけだった。勇ましい女リーダーから未練たらしい失恋女へ逆もどり。みんなにどれだけ誉められようと、だから、ちつとも胸がはずまない。文化祭までの約一カ月半、どう自分を保っていけばいいのかわからない。

足のくるぶしくらいまで落ちこんでいた心が一気に天井まではねあがったのは、その日の稽古を終え、すごすごと視聴覚室をあとにした直後だった。

「待って」

廊下に行くあたしを追ってきた声。見なくてもセンパイとわかった。

もしかして、ダメ出し？ 一日でクビ？

どきどきしながらふりむいたとたん、かつて見たことのないセンパイのぴかぴかの笑顔が目飛びこんできたんだ。

「今日のホン読み、すつごくよかったよ。こう言っちゃアレだけど、見直した。早奈にこんな才能があるなんて知らなかったよ。なんていうか、俺が頭に描いてたネズ美のイメージぴったりなんだ」

センパイがこんな顔をするなんて。こんな賞賛を口にするなんて。びっくりしすぎて声も出せないあたしに、センパイはなおも熱っぽく語りつづける。

「ネズ美はこのミュージカルの核であり、俺の理想の女性像でもある。だから絶対、妥協はしたくなかったんだ。ようやく期待のもてる役者があらわれてホッとしたよ。早奈のおかげで俄然、今後の稽古が楽しみになってきた」

かつて惰性のキスをしてくれたときよりもずっと濃厚なまなざし。

そっか、センパイはネズ美に理想の女性像を重ねてあの台本を書いたのか。

心でつぶやいた瞬間——そう、まさにそのとき、**ある作戦**があたしの頭にひらめいたんだ。

ネズ美はセンパイの理想。ってことは、稽古場でネズ美を演じてるときと同様に、現実の世界でもネズ美を完璧に真似てみせれば、センパイはあたしを好きになってくれる？

稽古のあとでセンパイの前ではネズ美の皮をかぶりつづける。素の自分を捨てて、ネズ美になります。

やってみよう。自信はあった。

だって、捨てるものにも、あたしには自分がない。

「あのわたし、ひとつ疑問があるんですけど、発声練習のあとに柔軟体操をする今の練習方法って、はたして適切と言えるのでしょうか。順序としては、柔軟体操で体をあたためてから発声練習をするほうが合理的じゃないですか」

「顧問の小沢先生が意見対立の末に今回の公演から手を引いた話、聞きました。センパイはくやしくないですか。わたしはネズ美を見捨てられた気がしてくやしいです。だからこそ尚のこと、なんとかしてもこのミュージカルを成功させたい、小沢先生の心を動かすようなネズ美を演じてみせたいと発奮しました。絶対に、最高の舞台にしてみせます」

「五匹のネズミが大空を舞うカラスを見あげるシーンですけど、ネズ美が『あつ、カラスの群れが自由に大空を舞っている』と天井を指さすよりも、効果音としてカラスの鳴き声を流したほうが有効ではないでしょうか。自分たちが求めてやまない自由を生まれながらにして謳歌しているカラスの群れを、五匹は声もなく目で追うんです。そのほうが切なさが伝わると思います」

「五匹が輪になってコサックダンスを踊るシーンも、はつきり言ってわたし、違和感があるんですよね。ドブネズミの原産地は中央アジアかシベリア南部と言われています。となると、劇中で彼らが踊るのは、ウクライナの伝統舞踊であるコサックダンスより、中央アジアや中東に広く分布するベリーダンスのほうが自然なのではないでしょうか」

ネズ美になりきるのはちつともむずかしくなかった。あたしのなかの空きスペースをセンパイの前では常時ネズ美に明け渡ししておくだけのこと。

いついかなるときも強気で快活、前向きにみんなを牽引する女リーダー。あたしがあればこれ考えるまでもなく、相川早奈の皮をかぶったネズ美は勝手にネズ美らしくふるまい、らしい発言を連発してくれる。

結果、気がつくとあたしはすっかり演劇部のリーダー的存在となり、部長にまでも相談をもちかけられるようになっていた。

さすが**センパイの理想像**。ネズ美。パワー恐るべし、だ。

で、肝心のセンパイのほうはどうだったのかと言うと……。

これまた効果てきめん。理想の女になりましたあたしを見るセンパイの目は、如実に、確実に、あれよあれよと変わっていったのだった。

「たしかに君の言うとおりだ。まずは体をならしてから発声練習をしたほうが効率がいい。さっそく明日からとりいれよう。いいアドバイスをありがとう」

「小沢先生が稽古に來なくなつたのは俺のせいでもあるんだ。彼女は大のネズミ嫌いで、せめて主人公はモルモットにしてほしいと泣きついてきたのに、モルモットはなんだかセレブっぽくていやだと俺は無下に却下した。多少のブルジョア臭には鼻をつまんで妥協すべきだったのか。内心では迷いを引きずってただけど、君のおかげでふつきれたよ。決めた。こうなったらどんなネズミ嫌いも泣いて喜ぶ感動作をつくりあげてみせる」

「その通り！ いかにも切なさを醸しだせるかがあのシーンの肝なんだ。君のおかげで開眼したよ。たしかに、セリフよりもカラスの鳴き声のほうがずっと観客の胸を打つ。説明的なセリフについて寄りかかってしまうのが俺の悪い癖なんだ。頼む、これからもどんだん意見を聞かせてくれ」

「浅慮な俺を許してほしい。深い考えもなしにコサックダンスを選んできましたが、五匹の原点をしかと誠実に見つめなおせば、彼らの内側からほとぼる踊りはベリーダンス以外にありえない。即刻、変更しよう。中盤で五匹が貪り食うチーズも、この際、ケバブに変更だ」

もはやセンパイとあたしは元カレと元カノの関係ではなかった。先輩と後輩でも、演出家と女優でもない。あえてたとえるならば、信奉者と女神？

うそみたいだけど、ほんとの話。

視界の片隅にも入らないどころか、もはやセンパイの眼中にはあたししか存在しなかった。あたしがネズ美になりきるほどに、かつてはつねに上から注がれていたその視線が下へ、下へと位置を逆転させていく。

「最高だ」

「天才だ」

「日本一だ」

「よっ社長！」

矢継ぎ早の賛美もそろそろらしく聞こえないほど、今じゃ誰の目にも明らかにセンパイはあたしに夢中だった。

なりすまし作戦、大成功！

と、ここで、予期せぬ落とし穴にあたしは気づいたのだった。

センパイの前にいるとき、あたしはあたしではなくネズ美だ。ネズ美はセンパイに恋をしていない。よって、いくらセンパイが熱をあげてくれても、ネズ美でいるかぎりは歓喜もなければときめきもない。

なんてこった……。

まさかの番狂わせにあたしはとほうに暮れた。センパイの気を引くために理想の女になりきったのに、ネズ美でいるかぎりにはセンパイと恋愛ムードにならないなんて。どちらかといえば、劇中でネズ美と結ばれるネズ太のほうが気になるなんて。ここまでまるごとネズ美にのっとられてしまう自分のからっぽさが空恐ろしくもある。

もちろん、センパイのいないところではネズ美モードもオフで、あたしはあくまで相川早奈だ。素のあたしはやっぱりセンパイが大好きで、稽古中、センパイがかけてくれた一語一語をぼうっと思い返したり、最近よく見せてくれるラクダの笑顔をまぶたの裏によみがえらせたりしている。

とはいえ、つきあっていた当時にくらべると、そのテンションはそれほど高くはないかもしれない。センパイのウエイトは今も大きいけど、それ以外のことを考える余白もちゃんとある。

というか、『ラッツ』の稽古が進むにつれて、センパイよりもお芝居のことを考えている時間のほうが増えてきた気がする。

そう。これまた想定外の展開なんだけど、ミイラとりがミイラになるというか、ネズミとりにネズミがかかるというか、どうやらあたし、本気でミュージカルにはまってしまったみたいだ。

だって、楽しいし、気持ちいい。自分以外の誰かになりきって、からっぽの中身を埋める。別の命、別の人生の重みを噛みしめながら大声で歌ったり踊ったりする。なにかに没頭することがこんなにも自分を高ぶらせ、毎日を充実させてくれるなんて思いもしなかった。こうなると、もっともっとやりたくなる。もっと上手に歌いたい。もっと上手に踊りたい。次第にあたしは学校の放課後だけでは飽きたらず、家に帰ってから延々と自主練を重ねるようになった。**ハケン時代にはありえなかったこと**。

これまででは、ずっと、そこそこでいいと思っていた。なんでも器用に無難にこなせば満足で、それ以上を求められたこともなければ自分に求めたこともなかった。我を忘れてひとつのことに熱中する、そんな青春みたいな一幕は自分とは無縁と決めつけて、みんなの輪の外で斜にかまえて。本当は、そこそこ以上をめざす自信がなかったのかもしれない。ミュージカルはそんなあたしに初めて本物の手ごたえを与えてくれた。早口言葉の特訓を積むほど舌がうまく滑りだす。独唱ソングを聴きこむほどに音程が体に染みこんでいく。筋力運動を積むほどにペリーダンスの腰つきが安定する。努力すればするだけ変わっていく自分がうれしくて、毎日が楽しくてしょうがない。

まさか、あたしがこんなにも熱くなるなんて。

この熱さははたして自分のものなのか、はたまたネズ美のものなのか。考えだすと頭がこんがらがってくるけれど、もはやそれすらもあたしにはどうでもいいように思えた。

そもそも、「自分」ってなに？

今さらながらあたしは思うんだ。劇中でネズ美は「本当の自分にもどりたい」とくりかえすけれど、本当の自分ってなんなんだろう？

たとえネズ美が人間に植えつけられた条件反射に支配されていても、その自ら制御できないしっぽのふりふりもふくめて、やっぱりネズ美はネズ美なんじゃないか。たとえあたしに自分がなくなたって、その虚無もひっくりくるめてのあたしなんじゃないか。

呪縛も呑みこむ。**虚無**も呑みこむ。そんな境地に行きついたとき、なんだかすうっと宙に溶けるみたいに、心の重石が外れてあたしは楽になった。解放感。すべてものからの。これはあたしが進化したってことなのか、身軽になったぶんますます中身がなくなったのか、よくわからないけどそれすらももうどうでもよくて、今はただただ早く舞台に立ちたい、そこでネズ美と完全にひとつになりたいと、それだけをめざして一刻一刻を激しく生きていた。

設問

問一 『ある作戦』とありますが、どのような作戦か。㉔文字以内で答えなさい。

問二 『センパイの理想像』とありますが、『理想像』が書かれている一文を本文中から探し、初めの五字を書き抜きなさい。

問三 『まさかの番狂わせ』とありますが、どのようなことが早奈にとって、『番狂わせ』だったのか。最も適切な答えを以下の㉒～㉜から選びなさい。

問四 『ハケン時代にはありえなかったこと』とありますが、どのようなことが『ありえなかった』のか。五十文字以内で本文中の言葉を使い、答えなさい。

㉒ センパイが早奈のことを好きになってくれたこと。

㉓ 早奈がセンパイよりも演技を好きになったこと。

㉔ 早奈がネズ美でいるかぎりセンパイに本気で恋ができないこと。

㉕ センパイが架空のネズ美に本気で恋をしてしまったこと。

問五 この物語を三つの場面で区切る時、二番目と三番目の場面の始まりとなる文を探し、最初の五字を書き抜きなさい。

問六 ネズ美と早奈を表している対照的な文をそれぞれ九文字で書き抜きなさい。

問七 『呪縛』と『虚無』とありますが、これらの意味として正しいものをそれぞれ以下の㉒～㉖の中から選びなさい。

㉒ 失うこと

㉓ もの寂しいこと

㉔ いいかげんなこと

㉕ 自由をうばうこと

㉖ だらしないうこと

㉗ 本質的なものの存在しないこと

解答

問1 .. 普段もネズ美を演じることで、センパイを振り向かせる作戦。

問2 .. いったいかな

問3 ..

問4 .. 一つのこと集中して、部活以外の時間でも自主的に練習をしたり、それが楽しいと思えたりすること。

問5 ..

二番目 .. 「あのわた

三番目 .. そう。これ

問6 .. ネズ美 .. 勇ましい女リーダー

早奈 .. 未練たらしい失恋女

問7 .. 呪縛 .. 4

虚無 .. 6